

研究者の「夢」と「責任」

心構えについて

テイヤール・ド・シャルダン奨学金

2004年度懸賞論文

武 田 和 久

外国語学研究科 地域研究専攻

博士後期課程

学籍番号 C0263003

## 要約

本稿では、まず、研究者の仕事は「夢」と「責任」という二つの要素を持つことを指摘した。次に、研究対象に向き合う際に研究者が持つべき心構えについて言及した。

研究者の仕事は二面の要素を持つ。すなわち「夢」の要素と「責任」の要素である。「『批判的な精神』に立脚して新たな論理や考えを『創造』する職業」を研究者の仕事と捉えれば、研究職とは極めて野心的かつ「夢」に満ちた職業といえる。その一方で、研究者には「責任」が課せられている。なぜなら、研究成果の公表が人を不幸にさせることもあるからだ。研究者は、この可能性を常に意識し、その仕事に伴う「責任」を忘れてはならない。

あらゆる研究は「個性」と「特徴」を持つ。従って研究者は、研究中の評価に値する面に注目せねばならない。研究を批判的に検証するからこそ、研究の中の積極的に評価されてしかるべき箇所に注意が向き、これを活かした研究成果を提示できるのである。

そしてよい面を見つけ出そうという態度で研究に向き合うには、研究者自身、「今自分が対象とする研究には何らかの魅力がある」というある種の「夢」を持たねばならない。あらゆる研究成果には、研究者と彼が生きた同時代の人々の様々な「想い」が詰まっている。我々は、その「想い」を敏感に感じとる「細やかな感覚」を養わねばならない。その一方で、研究中の評価に値する部分に注目することにも大きな「責任」が伴う。なぜなら、研究者がある先行研究を積極的に評価したことによって、議論の対象とならずに見過ごされてしまう問題もあるからだ。

研究職には「夢」と「責任」が伴う。この仕事に魅力を感じられるか否か、すべては、個々人の飽くなき探究心と果てしない情熱にかかっている。いつまでも「夢」を見続けることに伴う「責任」を決して忘れない人物、その人こそが研究職を目指すべきであり、また研究職が、このような人を希求するのである。

### 1 研究者の仕事

### 2 研究者の「夢」と「責任」

#### 2-1 「批判的な精神」に立脚した研究

#### 2-2 二つの立場

#### 2-3 立場を超えて

#### 2-4 「個性」と「特徴」を見つけ出す力

## 1 研究者の仕事

研究者の仕事とは、本質的に「夢」に満ちた特殊な職業といえる。そもそも現在、我々が「常識」と思っている事柄の多くが「研究」という行為によってはじめて明らかになり、月日をかけて人々の間で深く認知されていることが少なくない。特に人文科学の分野では、時代が経ることにより、まったく違った研究成果が出ることは決して珍しいことではない。従って、現代に生きる我々が「当たり前」と思っている事柄が、数百年後に生きる人々にとっては「まったくの非常識」に映る可能性は否定できない。先人が出した研究成果に決して全面的に賛同することなく、批判的な精神に常に立脚して、これまでとはまた違った視点から新たな論理や考えを「創造」する職業、これが研究者の仕事なのである。この意味で研究職とは、本質的に極めて野心的かつ「夢」に満ちた職業であり、たとえわずかであっても、可能性があればそれを信じて疑わない好奇心旺盛な人物に任されるべき仕事といえる。

しかしながら、研究職とは、やはり本質的に危険な側面を持つ職業ともいえる。なぜなら、有史が始まって以来、「研究」とは、人間の生活行為とかけ離れた「異質さ」を内包する仕事だからだ。通例、研究者は、周囲の環境と自身との間に一定の距離をおいて研究に専念する。そうしなければ、研究成果に絶対に必要な「客観性」が失われ、特定の人物の利益にかなうだけの世俗的な成果の提示と活用のみになってしまうからだ。だが、研究者が研究対象と一定の距離を保つことに重点をおいたからといって、必ずしも万人に幸福をもたらす成果が出ることも限らない。ある研究成果が出たことによって、かえって多くの人間が傷ついて悲しみを胸に刻んできたことは歴史がすでに証明している。研究者が長い時間と労力をかけて調べ上げた結果が、皮肉にも多くの不幸を生み出すことになりかねないのだ。この意味で研究とは、相反する二面性を内包した危険な職業ともいえる。

これまで見てきたことから明らかなように、研究者には、自身の好奇心のおもむくままにあらゆる事柄を探究できる「自由」が与えられる代わりに、大きな「責任」が課せられている。つまり研究者の発言や研究の成果一つで、世界中の人々の生活にある種の「影響」が及び、彼らの考え方や生活様式が変化してしまうこともあるのである。もちろん、人文科学の研究の場合、自然科学とは違って、ある研究成果が即座に世界の成り立ちや仕組みを激変させる力を発揮することなどまずありえない。しかし、長い目で見れば、あらゆる研究成果は、たとえ世界を一変させなくとも、成果の受け手には何らかの「影響」を与えることは間違いない。受け手は、その研究成果に触発されて研究意欲をかき立てられるかもしれない。あるいはまた、それに失望して研究に対する興味を失ってしまうかもしれない。重要なことは、研究者の主張が活字となって公表された途端、それは研究者のもとを離れ、顔も名前も知らない受け手をあらゆる意味で刺激する「装置」となることだ。研究成果が世界中の人々の生活を変えるという可能性、研究に携わる者がこの可能性をどれだけ深く認識し理解しているかが重要である。研究者は、学問分野や専門を問わず、このことを真摯に受け止め、研究に集中できる生活に伴うその「責任」を忘れてはならない。

## 2 研究者の「夢」と「責任」

### 2-1 「批判的な精神」に立脚した研究

そうは言っても、人文科学を専門とする研究者、あるいはこの分野の研究に将来的に携わろうと考える者にとって、自身の研究成果に対する「夢」と「責任」を実感できる機会は極めて乏しい。そこで今回は、私自身の研究テーマを例に、研究者の「夢」と「責任」について考えてみたい。

現在の私は、17 および 18 世紀のラプラタ地域 ( Región del Río de la Plata [ 現在のアルゼンチン北東部、パラグアイ南東部、ブラジル南部、ウルグアイ ]) に建設された布教区 ( スペイン語で *reducción* または *misión* ) におけるイエズス会士と先住民の生活について研究している。世界各地における会士の活動の中でも、ラプラタ地域におけるそれは特に有名であり、1986 年公開の映画『ミッション』にも大きな影響を与えた。

このテーマに関しては、イエズス会士の研究者が主体となって数々の研究がすでに発表されている。そしてその内容に関していえば、布教区での生活は、「牧歌的で争いのない理想郷」と語られる場合が多い。だが研究を進めるうち、実際の生活は、様々な問題と常に隣り合わせだったことが分かってきた。生活の一部が美しく強調されるばかりで、その実態を扱った研究の蓄積はまだ十分とはいえない。

このように現在、私は、これまでイエズス会士が出した研究成果を批判的に検証して、新たな成果を提示しようと試みている。当然この仕事には、ある種の「夢」が伴っている。なぜなら、先行研究に全面的に賛同することなく史料を読み直し、これまで研究者が見落としていたり、ほとんど価値をおいていなかったりした記述に注目して、今まで「史実」として大多数の人々に認知されていた出来事の信憑性に疑いを持って「史実の再解釈」を試みようというのだから。例えるなら、今まで「黒」と見なされていた事柄に含まれる「白い要素」を丹念に抽出して、それを基に新たな「物語」を書き上げるのが歴史家の仕事ともいえる。従って、これまで誰も為しえなかったであろう「物語」を書き上げることができれば、過去の出来事に対する人々の解釈の仕方にまた違った可能性を提供できるわけだから、歴史家の仕事は、ある意味「夢」に満ちた仕事の一つといえる。

だが、「夢」に満ちている分、この仕事には、他分野の研究者のそれと同様に大きな「責任」が伴う。例えば、先行研究の批判には細心の注意がいる。先行研究の成果は、過去数十年から数百年を経て人々の間で一定の理解を得られてきた事柄である。その理解に疑問を投げかけて、すでに人々が了解した事柄の違った側面に光を当てようというのだから、それには十分な調査と慎重さを持ってあたねねばならない。また、先行研究を批判的に解釈するにしても、研究者は、その仕方についてやはり十分に配慮せねばならない。先行研究の中には、間違った解釈があることがあり、その矯正が研究者の仕事であることはいうまでもない。しかし、先行研究の内容のすべてが間違っていたり事実と反していたりするはずもない。従って研究者は、先行研究と向き合う時、その内容の問題点ばかりに注目してこれを殊更に指摘するだけでなく、その中の極めて評価に値する部分を取り上げてそれ

を基に新たな解釈を引き出そうとする姿勢を忘れてはならない。つまり「批判的な精神」に立脚した研究とは、先行研究の中の問題点を見つけるための行為ではなく、その中の興味深い解釈や指摘を積極的に評価して、これまで「当たり前」と思われていた「前提」を見直す契機を提供するものでなければならない。

## 2-2 二つの立場

ラプラタ地域のイエズス会布教区に関連する先行研究について考える時、これまで述べたことは重要な意味を持つ。元来、この研究に従事する研究者の立場は二つに別れる傾向があった。すなわち、イエズス会士の活動に批判的な立場とこれを積極的に評価しようとする立場である。前者に立脚する研究者は、「イエズス会士は先住民の伝統文化を破壊した」、あるいは「先住民は半ば強制的にキリスト教に改宗させられた」と主張した。これに対してイエズス会士は、「先住民を布教区に入れたことによって、彼らは安全な生活を保障され、結果としてその伝統文化は消滅の危機を免れた」、あるいは「先住民は、イエズス会士から十分な説明を受けた上で布教区に入ってキリスト教に改宗した。従って、彼らは無理やり改宗させられたわけではない」と反論した。つまり両者の意見は、まったく相容れないものであり、議論は長い間平行線をたどった。

私自身、ラプラタ地域のイエズス会布教区の歴史を研究テーマに選んだことによって、非常に悩んだ時期がある。修士論文を書くにあたって、自分は一体どちらの立場に立脚すべきなのか、あるいは、いかなる観点に基づいて研究を進めるべきなのか、答えは容易には出なかった。だが私は、修士課程以降このテーマで研究を継続し、現在では、博士論文の執筆に取り組むまでに至っている。なぜなら、修士論文を書く際に抱えていた疑問に対して、自分なりの答えを見つけ出せたからである。

端的に言って、イエズス会士に批判的な意見も会士の反論も、互いの立場を色濃く反映した自己主張の域を出ない。例えば前者は、キリスト教の布教が先住民の伝統文化を変容させたことを理由にイエズス会士を非難した。だがこの批判は、17および18世紀という時代を考慮していない。当時のヨーロッパ人にとってキリスト教は「絶対」であり、イエスの教えを世界中に広めることは、高く評価されこそすれ、非難の対象となることなどまずなかった。つまりイエズス会士をはじめとする宣教師は、「正しいこと」、あるいは「道理にかなったこと」をしていると信じて疑わず、布教の拡大に力を注いだのである。従って、イエズス会士の活動を批判する者は、会士を対象とするよりも、会士たちが生きた「時代性」を批判的に検証し、キリスト教の布教が「道義」と考えられるに至った経緯や、宣教師を世界規模の布教の拡大に駆り立てた要因を明らかにして、現代に生きる我々にとって重要な「教訓」を導き出さねばならない。しかしながら、イエズス会士をまるで「文化の破壊者」のごとく捉えて彼らの活動のすべてを「悪」と決めつけるような研究成果がかつて出たのもこれまた事実であり、「批判」の難しさが改めて理解される。

他方、イエズス会士の反論にも問題がないわけではない。自分たちの活動に批判的な研

究に反論しようとするあまり、イエズス会士の研究者の中には、特定の会士が先住民に行った献身的かつ自己犠牲的な活動を過度に強調する傾向があった。また、先住民を生来的に「子供」と見なした 17 および 18 世紀の会士の見解をそのまま踏襲し、「イエズス会士の教導なしでは時を無為に過ごすばかりで、規則正しい生活を送れない人々が先住民」と結論づけてはばからなかった。なぜなら、布教区での生活をとおして、先住民がいかに理想的なキリスト教徒に生まれ変わったか、彼らがいかにキリスト教的な価値観を吸収してヨーロッパ文化に慣れ親しんだかを詳細に叙述することが、20 世紀初頭から前半におけるイエズス会士の研究者に課せられた主要な課題だったからである。

### 2-3 立場を超えて

このような状況を踏まえて、私がつとに至った研究姿勢が次である。すなわち双方の主張には、十分に評価すべき点もあるということである。例えばイエズス会士の活動に批判的な立場の研究者の中には、批判の根拠として、17 および 18 世紀に生きた会士が残した史料を用いて主張の論拠を明らかにした者がいた。また、彼らが先住民の伝統文化や慣習に重要な価値を見出したからこそ、それを変容させた宣教師の活動に異議を唱える状況が生まれたのである。実際イエズス会士に批判的な研究者からは、先住民の能力を過小評価する会士の態度は問題だとし、彼らを一人前の「人間」と見なすべきだという主張も出た。この主張は、先住民を「生来的な子供」と見なす立場を崩そうとしなかった 17 および 18 世紀に生きたイエズス会士の考えの問題点を取り上げた極めて興味深い指摘といえる。

その一方で、批判に対するイエズス会士の反論の中にも、極めて納得のいく内容が認められる。例えばイエズス会士は、布教区での生活をつうじて、先住民の文化をある種の強制力を伴って変えてしまったという「罪」を犯したと仮定しよう。しかし、17 および 18 世紀において、ヨーロッパ人入植者の搾取や襲撃から先住民を保護し、彼らの境遇や生活環境の改善を求めてスペイン国王や官吏に訴えを繰り返したのも、イエズス会士をはじめとする宣教師なのである。また、他の宣教師と比べて、イエズス会士は、スペイン領アメリカの辺境地帯、すなわちスペイン人入植者の手が及んでいない前人未到の土地に積極的に向かって、土地の開墾や領土の保全にも大きな役割を果たした。つまり、「キリスト教の拡大」に情熱を燃やした宣教師の存在なくしては、スペイン領アメリカの辺境地帯の開発にはかなりの遅れが出る可能性もあったのである。このような点を考慮すれば、イエズス会士をはじめとする宣教師の活動には極めて評価に値する面もあり、決して「先住民の文化の破壊者」という一言では捉えられない多様な要素を含んでいることがわかる。

### 2-4 「個性」と「特徴」を見つけ出す力

このように見えてくると、我々にはある結論が見えてくる。すなわち、すべての研究成果には積極的に評価できる面がある。従って研究者は、この面に注目して先行研究をさらに発展させねばならないのである。もちろんこの見解に対して異論もあろう。先行研究を「批

判的に」検証したうえで学問の進化と発展が促進されるのであり、研究のよい面だけを見ていて本当に新たな研究領域を開拓できるのかという問題はある。しかし、「批判的に」検証するからこそ、研究の中の積極的に評価されてしかるべき箇所に注意が向き、これを活かした研究成果を提示できるのではないか。本当の「批判」とは、対象の「個性」や「特徴」を見つけ出してそれを別の目的に活用する行為をいうのではないか。

そしてこのような態度で研究に向き合うには、研究者自身がある種の「夢」を持たねばならないと考える。あらゆる先行研究が持つ「魅力」を発見しようとする意欲を持つには、「今自分が対象とする研究には何らかの魅力がある」という「夢」、あるいは「希望」を捨ててはならないのである。果たしてこの世に、「見るに値しない研究」などあるのだろうか。あらゆる研究成果は、その研究に従事した者がある時間をかけて出したものである。つまり研究成果には、研究者の、そして彼が生きた同時代の人々の様々な「想い」が詰まっている。我々は、その「想い」を敏感に感じとる「細やかな感覚」を養わねばならない。なぜなら、対象の真の「魅力」とは、一見するだけでは的確に把握しえず、それを見極める能力を伸ばすことが研究者になるための第一歩なのだから。

また当然、先行研究の評価に値する部分に注目することにも大きな「責任」が伴う。研究者がある先行研究を積極的に評価したことによって、「間違った解釈」や「再検討を要する課題」が議論の対象とならずに見過ごされてしまわないとも限らない。従って、先行研究の「評価」に際しては細心の注意が必要である。

以上、研究職という仕事には大きな「夢」と「責任」が絶えずつきまとっている。この仕事に従事する人々は、「夢」を持てるから「責任」を課せられ、また逆に、「責任」があるから「夢」を見続けられるともいえる。研究職に魅力を感じられるか否か、すべては、個々人の飽くなき探究心と果てしない情熱にかかっている。いつまでも「夢」を見続けることを「幸福」と願う気持ちと夢見ることに伴う「責任」を決して忘れない人物、その人こそが研究職を目指すべきであり、また研究職が、このような人を希求するのである。